

独立行政法人 農業技術研究機構

果樹研究所ニュース

National Institute of Fruit Tree Science

2002.12



カキ「太秋」(たいしゅう)

発想の転換による研究推進を	2
8ヶ月で開花するリンゴの開発	3
糖度が高く早生の完全甘ガキ新品種「甘秋」 〈トピックス〉	4
リンゴ研究部一般公開	5
ブドウ・カキ研究部100周年記念 「果物と健康」講演会等	5

カンキツ研究部（口之津）で全所部長会議開催	5
農業技術研修生韓国視察研修に	6
平成14年度専門技術員研修「専門研修」	6
表彰・受賞	6
〈掲示板〉	
人事異動・研修・海外出張・依頼研究員等	7





巻頭言

発想の転換による研究推進を

ブドウ・カキ研究部長 家城 洋之

果物は嗜好品から食べ物へと位置付けられ、各種の機能性成分、ビタミン類、栄養素等を含有し、生活習慣病を予防し、健康になくなくてはならない食べ物であるとされた。スーパーや果実専門店では、国産はもとより輸入された多くの種類の果実が販売されている。それにもかかわらず、バブル崩壊後の長期不況の影響を受け販売価格の低迷と消費が減退している。果樹産業を取り巻く環境は必ずしも楽観視されるものではない。このような状況を打破するには、果樹の研究に携わる者として責任の一旦があると言えよう。

原点に戻る意味から、27年前初めてタイ国を訪問した時の強烈な経験を思い浮かべてみることにする。タイのマーケットでは、熱帯果物の王様と言われるドリアンをはじめとして、マンゴ、マンゴスチン、各種カンキツ類、ライチー、ランブータンなど数多くの果実が山と積まれて売られていた。その時、マーケットの雰囲気には圧倒されたことが思い出される。薄暗く、独特の臭いの中にも人々の活気がみちあふれていた。しばらく見て回りようやく果物の顔が見え始めると、また驚きであった。日本で見られる果実とは違って、各種の病害や害虫による傷害が見られ、日本ではとても売り物にはならない果実であった。タイの人たちは一向に気にする様子もなく、マイペンダイ（気にしない：タイ人がよく使う言葉）と言って売買しているのである。タイの友人は、サビダニで黒くなったカンキツ果実の方が美味しいというのである。即ち美味しいから虫も食べるとのこと。なるほどそういう理解もあるのだと感心させられた。一方、ヨーロッパを旅行した時も、街で売られている果実を見ると病害虫による傷害が、アジア諸国ほどではないが見られるものが多く、あまり気にしてい

ないようであった。

それに比べて日本の果実は、病害虫の傷害がなく実にきれいなものである。これは市場での評価、即ち病害虫による傷害が少しでも見られると等級が下位に位置付けられ、価格が安くなるためである。栽培者は少しでも評価を高くし、高値で販売できるように病害虫防除を熱心に行った結果なのである。海外から多くの安価な果実が輸入されており、それに対抗するにはどうしても高品質果実である必要がある。外観はその中でも重要な要因の一つであるからである。

近年、環境保全、無登録農薬の使用問題、食の安全性が叫ばれ有機農産物への消費者の要請が強まっていることを考えると、食味に影響がない外観のみに被害を与える病害虫については防除の必要がないとも考えられる。しかし、これには消費者の理解が得られ、かつ市場での評価に影響しないというコンセンサスが確立できればとのことである。そうなれば有機化学農薬による防除を最少限とし、環境に優しい天敵、フェロモン、微生物農薬による生物防除への転換が一層進むであろう。

果樹産業の現状を打破するには研究の推進が必要であり、それには発想を転換させることであろう。ビル・ゲイツによるとアイデアとは、「他人に話した時なるほど」と思わせるものではダメで、「笑われ一笑されるものが価値ある」と言っている。要するに奇抜なアイデアが大きな発見、発明、技術開発につながると言うことであろう。アイデアを大事にして、基礎から応用研究へと発展させることにより、新しい技術の開発へと花を咲かせたいものである。

果物展示館④ ナシ



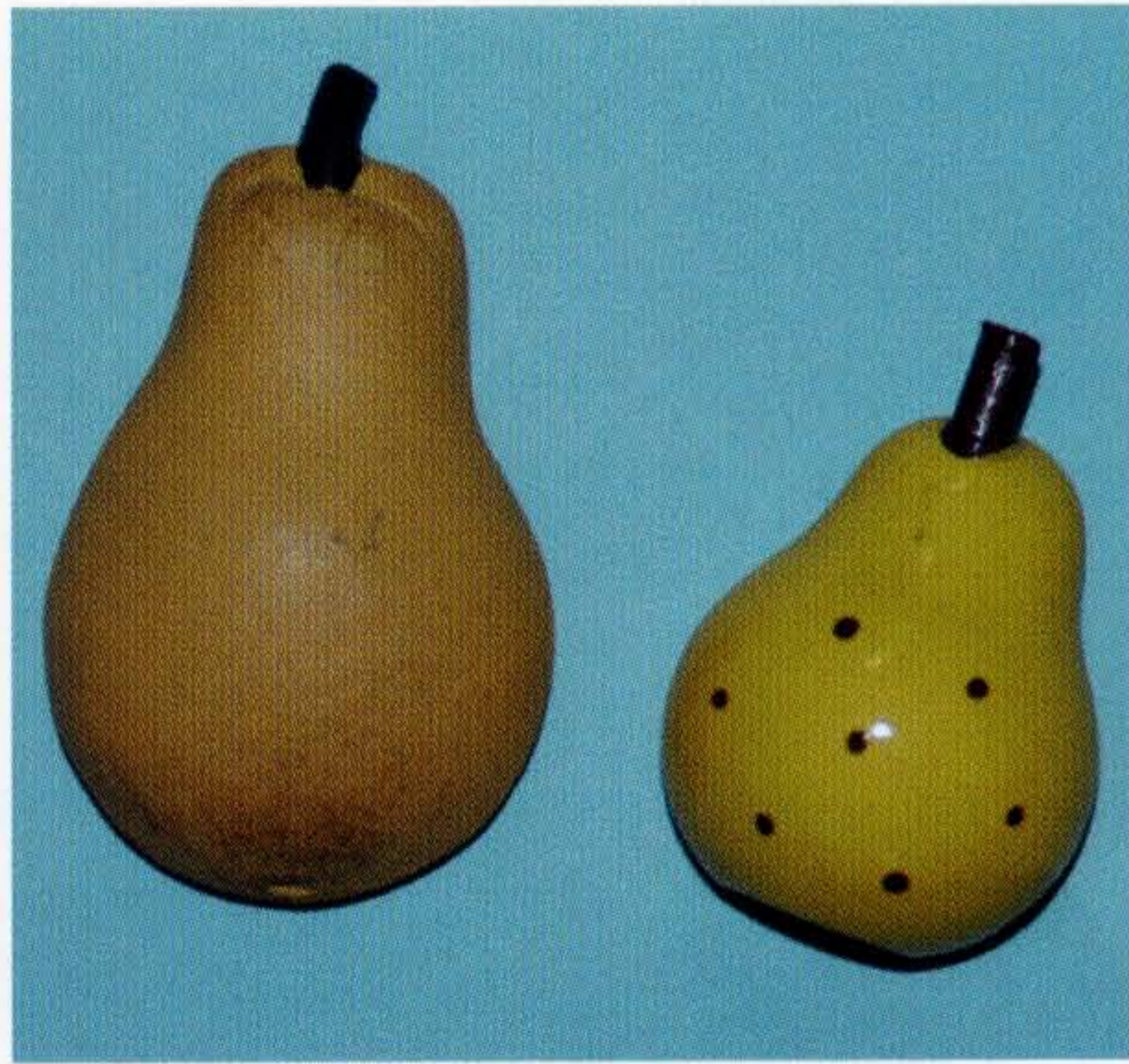
キャンドル



クリップ



ナシ・虫



マグネット



栓



研究の紹介

8ヶ月で開花するリンゴの開発

リンゴ研究部 育種研究室 古藤田 信博

永年性である果樹は、モモ・クリ3年カキ8年と言われるように花が咲き実がなるまでの幼若期間が長く、遅いものでは播種後10年くらいは結実しません。リンゴ「ふじ」を例にとると、「国光」×「デリシャス」の交配が1939年、のちに「ふじ」と命名される実生系統の初結実が12年後の1951年、「ふじ」命名が1962年と、交配から登録品種となるまでには23年を要しました。果樹の育種事業を行う際、この長期の未結実期間中は果実調査を行うことはできず、効率的な新品種開発の大きな障害となっています。生産者にとっても、苗を植えてから結実までの期間は収益があがらず、収益がプラスになるには10年近くを要しています。そのため、永年性果樹作物における幼若性の解明と制御は海外の研究機関でも重要なテーマとなっていますが、果樹研究所リンゴ研究部では花芽の形成に関与する遺伝子に着目し、遺伝子レベルでの幼若性解明と幼若期間短縮技術の開発に向けてリンゴを中心に研究しています。

シロイヌナズナは双子葉植物のモデルとして生理学的・遺伝学的に世界中で広く研究されていますが、花芽形成を抑制する機能をもつTERMINAL FLOWER1(ターミナル フラワー1:TFL1)というシロイヌナズナの遺伝子と相同な機能を持つ遺伝子をリンゴから単離し、MdTFL (エムディーティーエフエル: *Malus domestica TFL*)と命名しました。そこで、リンゴにおいてMdTFLの発現を抑制することにより花芽分化の促進を引き起こし、結果としてリンゴを早期開花させる

方法を考えました(図1)。すなわち、MdTFLの発現を抑制する機能を持つ形質転換用ベクターをリンゴ「王林」の葉片培養細胞に導入し、MdTFL遺伝子の働きを抑制したリンゴ「王林」の組換え体を作出しました。続いて、組換え体「王林」から取ったシュート(茎頂部)を鉢植えの台木に接木し苗木を作出し温室内で生育させたところ、驚くべきことに8ヶ月で開花した系統が得られました(図2)。さらに、この組換え体「王林」は、交配により正常に結実し、種子を得ることができました(図3)。この成果は、リンゴの開花樹齢としては世界最短であり、リンゴの組換え体の日本で最初の開花としても注目されており、現在「花芽形成抑制遺伝子及び早期開花性が付与された植物」として特許申請中です。

本成果によりリンゴでは幼若期間を著しく短縮する技術開発が可能となりました。果樹研究所では将来的に幼若期間短縮技術を確立し、果実特性の早期評価による品種育成の加速化や世代促進技術の利用によるゲノム解析の格段の促進を図っていくことをめざしています。そのため、早期開花性リンゴの(1)開花・結実の安定性、(2)早期開花性の後代への遺伝、(3)組換え体の安全性について詳細な解析・評価を行い、一層の実用化へ向けて重点的に研究を進めていく計画です。また、本成果は、果樹栽培における未結実期間の短縮、新品種への更新促進、栽培コストの削減など収益増に繋がる可能性のある基礎的研究成果として大きく期待されており、他の木本植物などへの応用も可能と考えます。

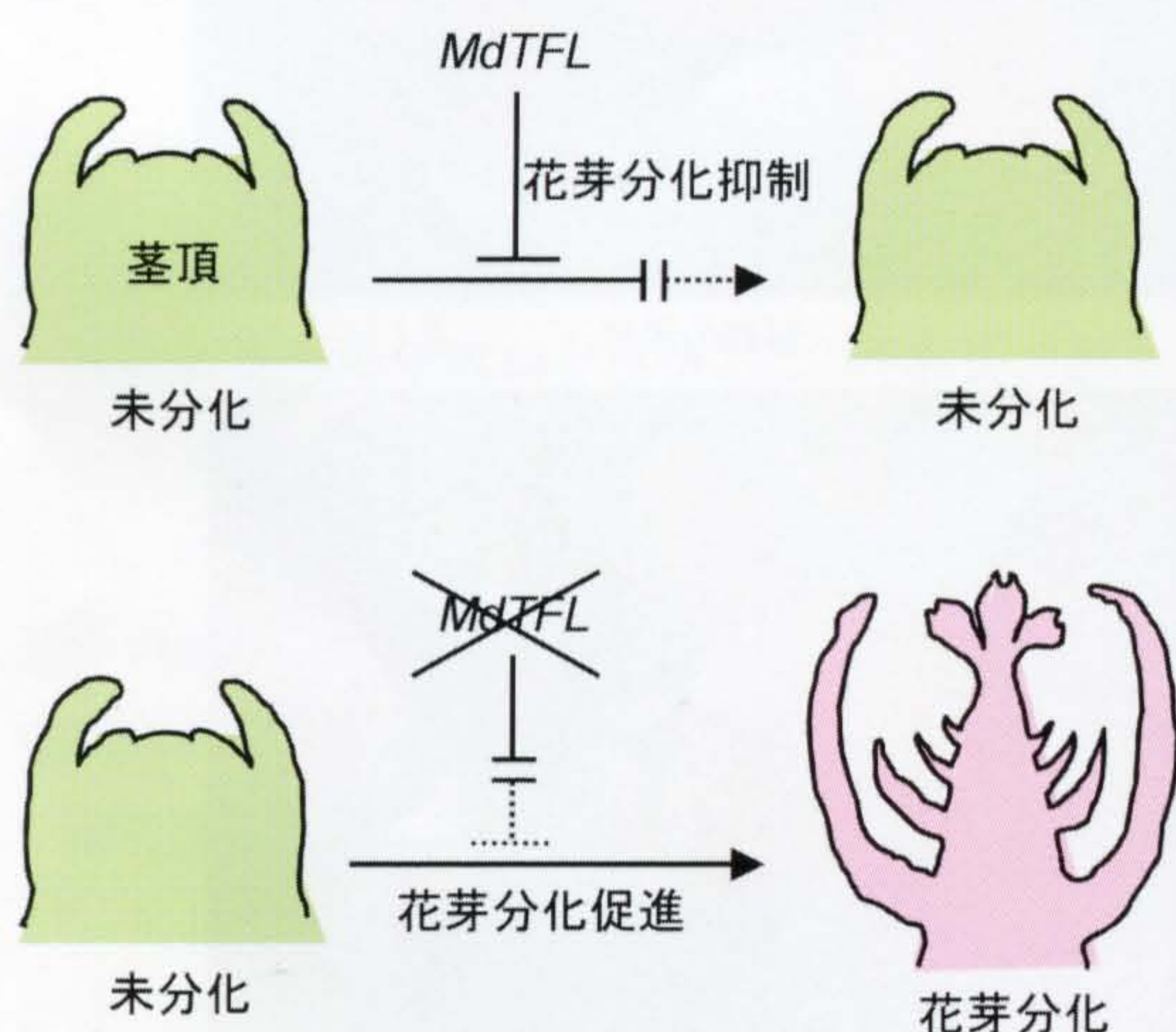


図1 MdTFL遺伝子の発現抑制によるリンゴの花芽分化誘導



図2 早期開花した組換えリンゴ樹

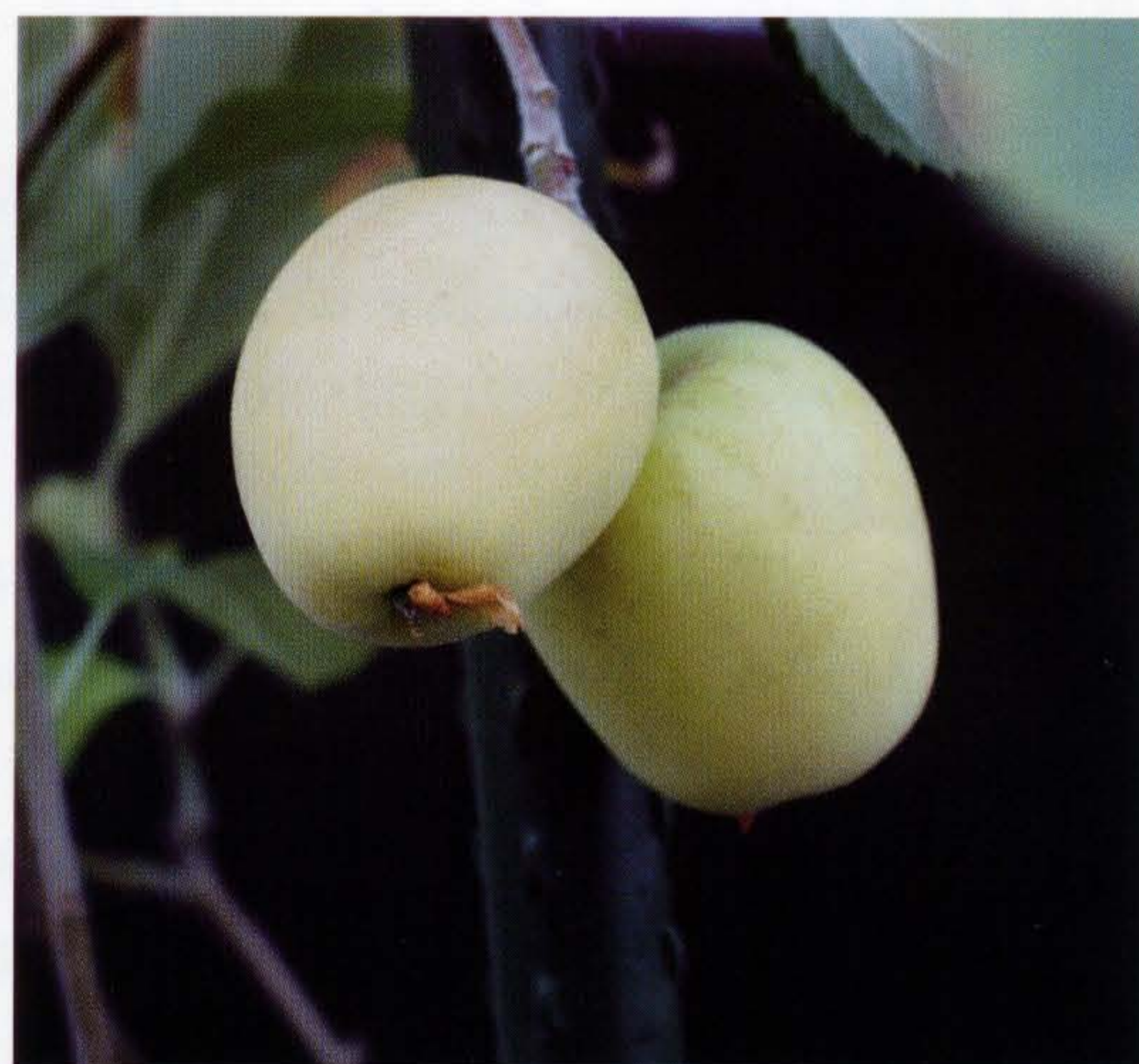


図3 早期開花系統の結実状況

研究の紹介

糖度が高く早生の完全甘ガキ新品种「甘秋」

ブドウ・カキ研究部 育種研究室長 山田 昌彦

育成経過

甘ガキには完全甘ガキ品種と不完全甘ガキ品種がある。不完全甘ガキは多くの種子ができた時だけ甘ガキとなるものであり、種子とは無関係に安定して甘ガキを生産できる完全甘ガキ品種が望ましい。経済栽培されている完全甘ガキ品種は、中～晩生である「富有」、「次郎」およびその枝変わり品種が主体である。そのため、早生の優れた甘ガキの品種開発の要望が強い。果樹研究所では、食味が優れ、へたすき性がない極早生の完全甘ガキ品種として2000年に「早秋」を育成した。これに続き、糖度の高い早生の完全甘ガキ品種、「甘秋」を育成したものである。

「甘秋」は、「新秋」に「18-4」（「富有」×「興津16号」）を交雑して育成した品種である。1986年に交配を行い、1987年に播種、1988年に結果促進のために「富有」に高接ぎした。1994年に一次選抜し、1996年より「カキ安芸津14号」としてカキ第5回系統適応性検定試験に供試して特性を検討した。2002年9月3日付けで「甘秋」と命名、農林水産省育成農作物新品种「かき農林10号」として登録された。また、種苗法に基づく品種登録の出願を行った。

特性の概要

果実成熟期は早生で、「伊豆」と「松本早生富有」の中間の時期である。果形は扁平で、果実重は「松本早生富有」より小さく、「伊豆」と同程度である。果皮色はあまり赤くなく、育成地では果頂部のカラーチャート値で5.9程度である。適熟果の肉質は緻密で、果汁の多さは中程度である。糖度は高く、育成地では、「伊豆」より2.8°Brix、「松本早生富有」より1.5°Brix高く、赤道部で18°Brix程度であり、食味は良好である。果頂部は果底部よりやや早く成熟する傾向がある。日持ち性は良く、育成地では常温で16日程度日持ちする。へたすき果、果頂裂果はほとんど発生しない。

汚損果の発生が多く、雲形状汚損が多い。汚損果の発生率は、系統適応性検定試験実施27場所の平均値で40%（1999－2000年）であった。

樹勢は中程度で、樹姿は開張と直立の間である。雄花を少し着生する。雌花の着生は多い。雌花の開花期は「松本早生富有」とほぼ同時期である。単為結果力が高く、種子形成力もかなり高いので、生理落果は少なく、結実は安定してい

る。果実はチャノキイロアザミウマの被害を少し受ける。

栽培上の留意点及び適応地域

本品種は、早生で糖度が高く、食味が優れ、樹勢・結実性も一般に良好であるが、汚損果の発生が多く、生産・販売に当たっては注意が必要である。

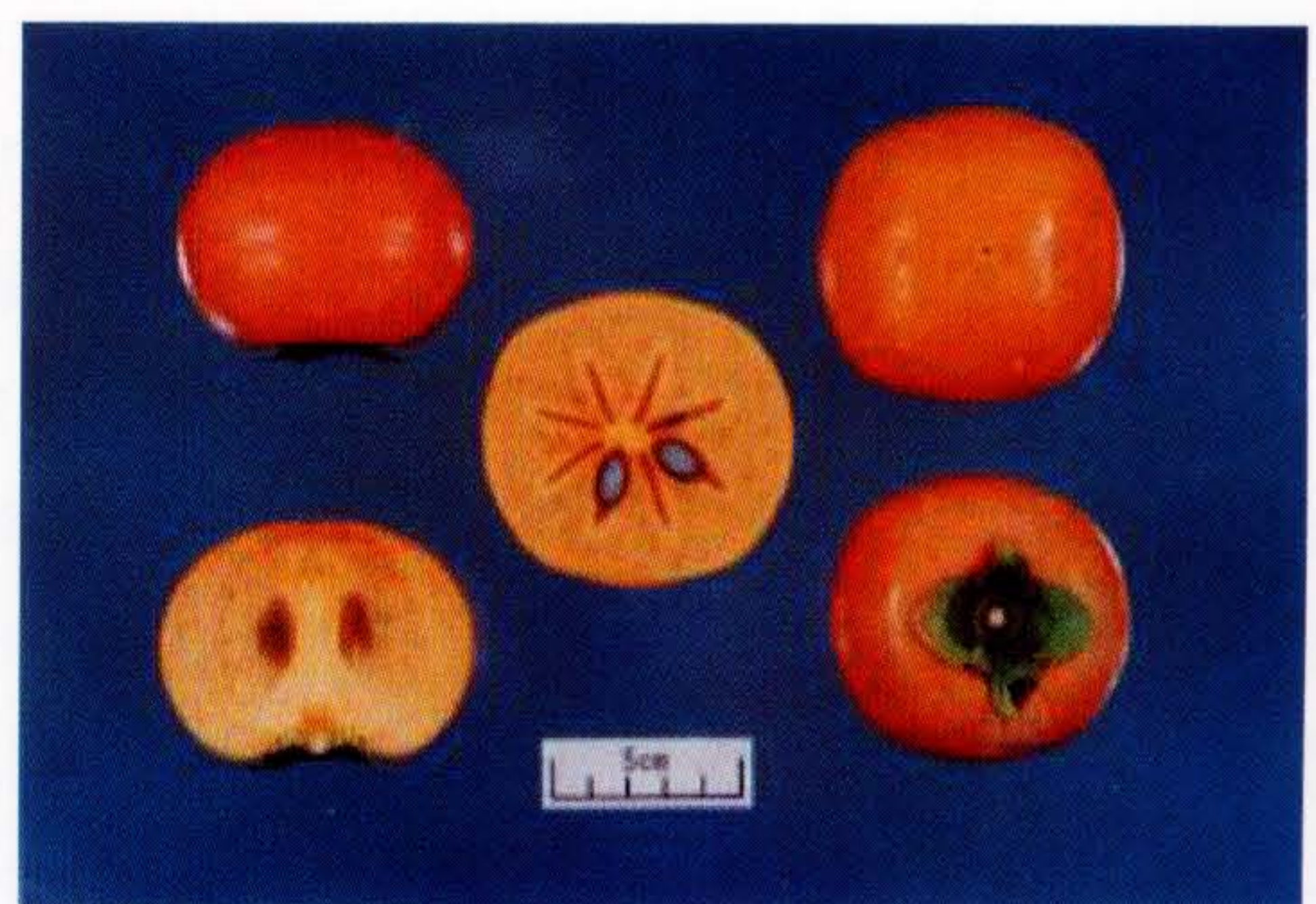
甘秋は完全甘ガキであり、夏秋期の気温の高い地域に適応し、一般に「松本早生富有」、「富有」、「次郎」、「前川次郎」栽培地域で栽培できる。地域適応性は、「富有」、「松本早生富有」より広く、試験の結果、北陸地方の一部地域でも渋残りはなかったが、東北地方南部、高冷地、内陸部などでは、年により渋残りが生じた。

命名の由来

甘秋という名称は、秋に成熟する糖度の高い果実、という意味による。

育成者

山田昌彦、山根弘康、佐藤明彦、吉永勝一、平川信之、岩波宏、小澤俊治、角谷真奈美、三谷宣仁、吉岡美加乃、中島育子



甘秋の果実



甘秋の結実状況

リンゴ研究部一般公開

トピックス

北都盛岡にあるリンゴ研究部の一般公開は、「リンゴの成熟をもう少し待ちたい」けど、「風が冷たくなる前にやりたい」というジレンマの中で期日を決めることになります。今年は前者の主張が勝り、10月19日（土）と少し遅めの開催になりました。覚悟していたとおり肌寒い一日となりましたが、話題の新品種「さんたろう」「きたろう」や、お披露目前の有望系統の収穫がぎりぎり間に合い、ご来場いただいたおよそ1,250人の方々に、早生・中生のリンゴを幅広く知っていただく良い機会となりました。

今年の一般公開は「園芸試験場百周年記念事業」の一環と銘打って行われたため、「知ってるリンゴの知っ得歴史ーリンゴの日本史・世界史ー」というテーマのもとに、リンゴや園芸研究の歴史にスポットを当てた展示を行いました。また、マイクロバスを使った圃場案内ツアーやリンゴなど果実を使った草木染め体験といった新しい試みも導入されまし

た。毎年一番の人気コーナーである「リンゴ料理試食」ではボリューム満点のリンゴカレーをメインに提供し、72人収容の仮設休憩室には、リンゴ料理を頬張りながら談笑する家族連れの姿が絶えませんでした。

その他、リンゴ品種当てクイズ、リンゴ釣りゲームなど恒例の楽しい企画も満載で、お来しいただいた方々には、秋の一日、リンゴの魅力溢れる世界をまさに堪能していただけたと思います。なお、この様子は翌日の朝日新聞岩手県版に写真入りで紹介されました。



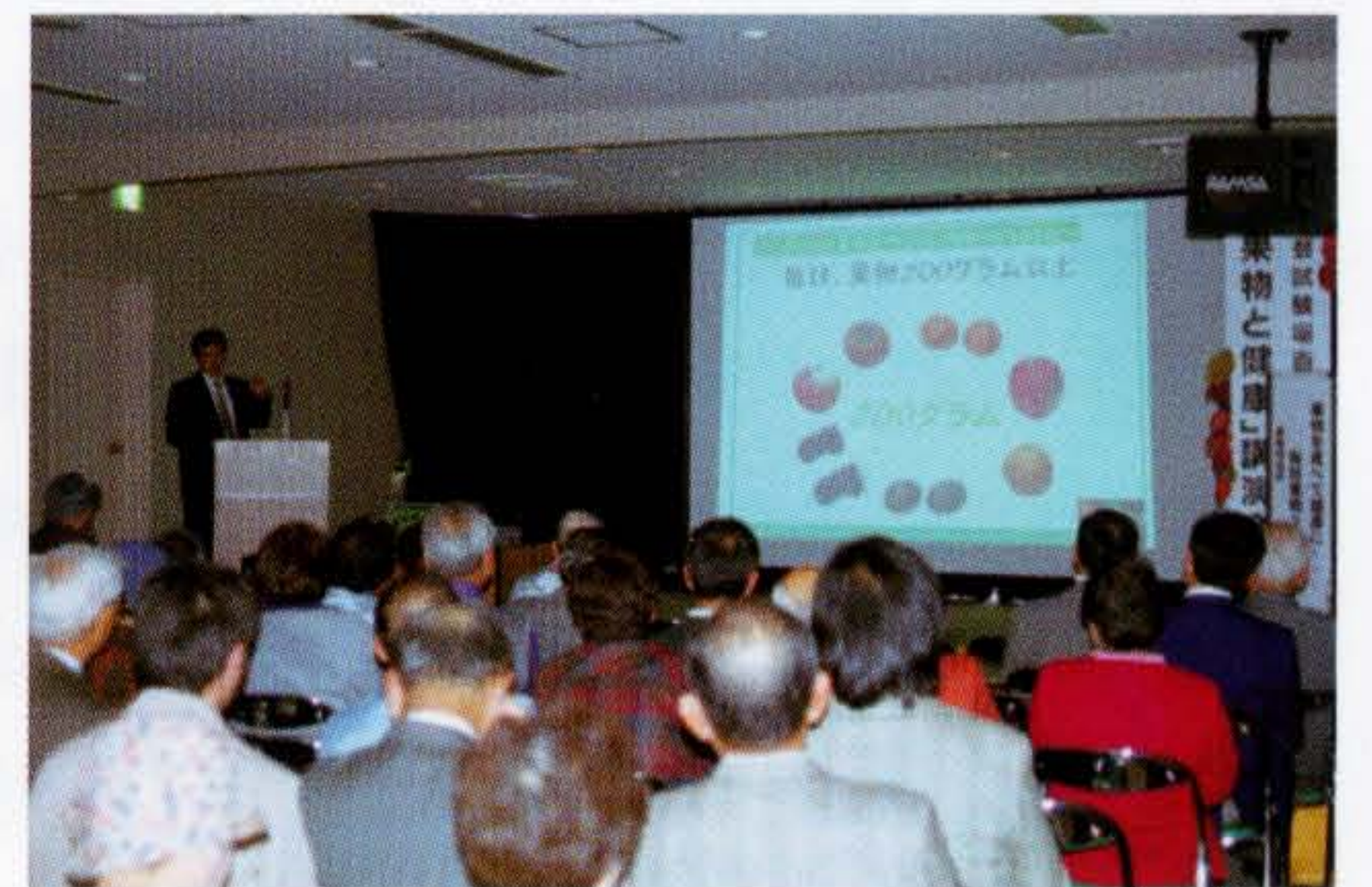
リンゴ試食

ブドウ・カキ研究部100周年記念「果物と健康」講演会等 トピックス

安芸津町で毎年開催される「火とグルメの祭典ーあきつフェスティバル」に合わせて、本年は11月16日（土）に園芸試験場百周年記念行事の一環として「果物と健康」講演会等を町役場横の「世代間交流センター」で行った。講演会では、広島果実連の大会会長が「21世紀における果物生産と食べ方への提言」、カンキツ研究部の吉岡主任研究官が「カンキツの新しい品種」を、その他当研究部4名が講演を行った。出席者は約200名と、準備した座席はほぼ埋まり盛況であった。果物試食コーナーでは、当研究部育成のカキ「太秋」、「陽豊」が美味しいと、人気があった。産地からの来訪者が多く、ほ場案内、園芸相談、接ぎ木実演が大忙しであった。講演終了後、ブドウ苗木の抽選会が行われ、80本の苗木がプレゼント

され好評であった。当日の夜に「へんこつ苑」で、駆けつけたOB、桜会会員15名と職員とが参加して懇談会が行われ、思い出話に花を咲かせた。

また、メイン会場では16、17日に、カキ果実やパネル展示と果物クイズを実施し、果物の名前を「安芸クイーン」と「太秋」とした正解者に、カキ等のプレゼントを行い、両日で約2,000名と大盛況であった。



講演会

カンキツ研究部（口之津）で全所部長会議開催 トピックス

果樹研究所の平成14年度第2回全所部長会議を、初めての試みとして隔地部であるカンキツ研究部口之津において、10月15～16日に開催しました。所長挨拶のあと庶務関係・予算関係の検討を行い、次いで口之津圃場・施設視察を挟んで研究関係の検討を行いました。

研究関係では、各樹種・地域の重要問題、競争的資金プロジェクトの獲得に向けた取り組み、果樹研究所評価委員会の総括、業績評価、養成研修制度の見直し等について検討を行った他、特に温暖化とカンキツグリーンング病、近畿中国四

国農業研究センターで行われるカンキツ地域総合研究との連携、隔年交互結実技術開発の今後の推進方向等、カンキツ産業をめぐるの重要問題について集中的検討を行いました。

遠隔地である口之津の諸条件を改めて認識するとともに、カンキツ農業からの大きな期待に応え、新品種開発の効率化、省力化技術開発、環境保全的病虫害対策技術など基礎から実用技術開発までアクティブな研究活動の推進を確認しました。

農業技術研修生 韓国視察研修に

トピックス

果樹研究所の農業技術研修制度は明治39年に始まった見習生制度に端を発し、これまで、全国津々浦々に卒業生を送り込み、各地域における、果樹農業の中核として、我が国の果樹産業の振興に計り知れない役割を担ってきました。

農業技術研修生の多くは、研修修了後、地元に戻り、実際に果樹園経営に携わることになっていますが、若者の果物離れが進む今日、外国から安価な農業生産物が大量に入荷され、デフレ傾向と相まって、国産農産物価格の低迷が続く中、単に果物作りだけをすれば済む時代とは異なり、国際競争力、果物の安全性や機能性など多くの分野に視野を広げた、経営戦略をもつ必要があります。

こうした果樹農家を取り巻く、厳しい状況や、現場における意欲的な、果樹栽培技術や、幅広い知識を習得し、社会的な見識を高めるため、現地研修を行っています。

これまでは、北海道と長野、山梨県を中心とした中部方面を1年おきに実施してきたところですが、我が国と競争関係にある海外農業に目を向けると共に国際感覚を身に着けることが将来の果樹園経営の成功につながると考えて、韓国現地視察研修を去る9月30日から4泊5日の行程で実施しました。

韓国では、カキ、クリ、ナシ及びブドウ農家を訪問し、樹形や園地管理及び販売方法などを果樹農家から直接話を聞くことができ、甘ガキ試験場、ナシ研究所

及び園芸研究所では、韓国の果樹に関する試験研究の状況を視察することができました。加えて、ソウル市内の市場見学を通して、韓国果実の流通経路や品質などに関する知見を得ることができました。

早速、10月22日には所内報告会を開きましたが、研修生の感想は、異口同音に、韓国の果樹農家は、何事にも熱心かつ積極的に取り組んでいることやクリの「秋峰」やカキの「太秋」など日本の新しい品種のこともよく知っており、非常に興味を持っていることを強く感じ、身の引き締まる思いがいっそう強くなったとのことでした。



韓国のクリ栽培農家で

平成14年度専門技術員研修「専門研修」

トピックス

農林水産省経営局が主催する平成14年度専門技術員研修「専門研修」が、10月23日～10月25日の3日間にわたって果樹研究所本所で開催されました。本研修会は県の専門技術員を対象としたもので、今回は9名が参加しました。研修実施課題は「持続的果樹栽培における基礎技術」で、果樹研究所生理機能部の研究員が講師として指導にあたりました。研修会では、福元将志生理機能部長が、環境負荷の少ない持続可能な果樹の安定生産技術開発の取り組み状況を解説し、今後は地球温暖化の影響を考慮した技術開発に取り組む必要があることなどを提起しました。生理機能部の杉浦俊彦主任研究官からは、「落葉果樹における休眠と自発休眠覚醒期の予測技術」、梅宮善章室長からは、「果樹園土壌の施肥と資材による変化」、中村ゆり主任研究官からは、「窒素吸収制御の分子機

構」など、持続的農業生産技術開発を進める上で重要となる基礎理論の解説が行われました。この他、田中敬一室長らによるリンゴの果皮や果芯部を有効利用したリンゴジャムやゼリーの加工実習、樫村芳記室長らの酵素化学実験など、10課題の講義・実習を行いました。また、果樹研究所職員との交流会や意見交換会も開催されました。日頃、現場で果樹農業の技術指導の先頭に立っている専門技術員の方々からは、「内容は難しかったが、技術の裏付けになる基礎理論が聞いて大変興味を持った。」「日頃体験できない実習もあり、これからの仕事を続けるうえで非常に参考になった」など、おおむね好評を得ました。果樹現場の専門家である専門技術員と、現場に役立つ技術シーズの開拓を目指す果樹研究所の職員が互いの連携・協力の重要性を改めて確認した研修会でした。



学 位

「チェリモヤとシロサポテのハウス栽培における

開花・結実と果実保蔵の基礎的研究」

米本 仁巳（カンキツ研究部 栽培生理研究室）

平成14年9月20日付 近畿大学農学研究科 博士（農学）

◆人事異動名簿

(平成14年9月2日～平成14年12月31日)

異動年月日	異動事由	新	旧	氏 名
14. 9. 9	育児休業	育児休業（平成14年12月31日まで）	ブドウ・カキ研究部（栽培生理研究室）	児下 佳子
14.10. 1	転任	総務部会計課課長補佐	農林水産技術会議事務局筑波 事務所研究交流課課長補佐	舘山 和俊
"	採用	生産環境部（病害研究室）		中村 仁
"	配置換	総務部会計課予算決算係長	中央農業総合研究センター 総務部庶務課職員厚生係長	飯岡 浩一
"	"	総務部口之津総務分室用度係長	総務部口之津総務分室会計係長	道野 慶子
"	"	総務部口之津総務分室会計係長	野菜茶業研究所総務部枕崎総務 分室庶務係長	高木 啓介
"	出向	大臣官房経理課営繕専門官	総務部会計課課長補佐	千葉 雅志
"	"	農林水産技術会議事務局国際研究課 連絡調整班海外派遣係長	総務部会計課予算決算係長	松井 利彦
"	"	食品総合研究所総務部庶務課 庶務係長	総務部口之津総務分室用度係長	井上 昭利
14. 4. 1 (14.10.30施行)	昇任	遺伝育種部主任研究官（核果類育種研究 室）	遺伝育種部（核果類育種研究室）	八重垣英明
"	"	生理機能部主任研究官（栽培生理研究室）	生理機能部（栽培生理研究室）	伊東 明子
"	"	カンキツ研究部主任研究官（病害研究室）	カンキツ研究部（病害研究室）	伊藤 隆男
"	"	リンゴ研究部主任研究官（病害研究室）	リンゴ研究部（病害研究室）	兼松 聡子
"	"	リンゴ研究部主任研究官（虫害研究室）	リンゴ研究部（虫害研究室）	豊島 真吾
"	"	ブドウ・カキ研究部主任研究官（病害研 究室）	ブドウ・カキ研究部（病害研究室）	中畝 良二

◆果樹研究会等

(平成14年9月1日～平成14年12月31日)

開催年月日	研究会名	主催機関及び共催機関	場 所	人数
14.10. 3～ 4	平成14年度リンゴ系統適応性・特性 検定試験現地検討会	農研機構果樹研究所	青森県りんご試験場 (青森県黒石市)	40名
14.12. 4～ 5	第4回果樹バイテク・ゲノム研究会	農研機構果樹研究所 農林交流センター 農林水産技術情報協会 STAFF（後援）	農林水産技術会議 筑波事務所	160名

◆職員の研修名簿

(平成14年8月1日～平成14年12月31日)

研修名	氏 名	所 属	期 間	備 考
平成14年度企業会計基礎研修 (簿記3級コース・筑波地区)	室田 美玲	総務部	14. 8. 7～14.11.13 (毎週水曜日)	農業技術研究機構
"	寺田 勝治	"	"	"
"	石川 洋子	"	"	"
"	川田 博行	"	"	"
"	鈴木 正祐	"	"	"
"	鈴木 崇仁	"	"	"
"	松井 利彦	"	"	"
"	稲田みつ子	"	"	"
IT化推進リーダー養成研修	室田 美玲	"	14. 8.27～14. 8.29 及び 14. 9.10～14. 9.12	"
"	浅田 幸子	"	"	"
"	朝比奈 隆	興津総務分室	"	"
"	久田二三彦	口之津総務分室	"	"
"	藤原 孝昭	盛岡総務分室	"	"
"	今田 英子	安芸津総務分室	"	"
平成14年度一般職員行政基礎研修 (行政コース・第2班)	畠中 直	総務部	14. 9. 2～14. 9.27	農林水産研修所
平成14年度たい肥施用コ－ディ ネーター養成研修	萩原利喜一	企画調整部	14. 9.30～14.10. 4	(財) 農業技術協会

研修名	氏 名	所 属	期 間	備 考
第30回関東地区係長研修	丸田 理一	総務部	14.10.15～14.10.18	人事院関東事務局
平成14年度数理統計短期集合研修	土田 靖久	ブドウ・カキ研究部	14.11.11～14.11.15	農林水産技術会議事務局
第2回行政研修（課長補佐級）科学技術・研究振興コース研修	櫻村 芳記	生理機能部	14.12. 3～14.12. 5 14.12. 9～14.12.13	人事院公務員研修所
平成14年度ほ場管理者研修（農作業安全実践技術と指導法研修Ⅱ）	花岡 政則	ブドウ・カキ研究部	14.12. 9～14.12.13	農業技術研修館
ITベーシックコース（パソコンの仕組みと管理）研修	谷田部知子	企画調整部	14.12.12～14.12.13	（株）CSK
平成14年度企業会計入門研修	竹ヶ原徹美	〃	〃	農業技術研究機構
〃	芝原 希	総務部	〃	〃
〃	飯岡 浩一	〃	〃	〃
〃	三嶋 和正	安芸津総務分室	〃	〃
〃	安東 優	〃	〃	〃

◆渡航実績

(平成14年9月1日～平成14年12月31日)

氏 名	所 属	渡航目的	主要訪問都市	期 間
山田 昌彦	ブドウ・カキ研究部育種研	要請出張	中国・湖北省	14. 9.24～14.10. 1
梶浦 一郎	所長	要請出張	イラン・ゴルガン	14.10.24～14.10.31

◆依頼研究員

(平成14年9月1日～平成14年12月31日)

氏 名	所 属	試験研究課題	期 間	受け入れ研究室
小野 勇治	福島県果樹試験場	果樹の遺伝子マーカーを利用した育種法の開発	14. 9. 2～14.11.29	遺伝育種部上席研究官
狩野 正美	群馬県園芸試験場	ナシの摘心処理と花芽形成に関する研究	14.10. 1～14.12.29	生理機能部栽培生理研究室
大原有美子	佐賀県果樹試験場	果実の健康増進成分の分析手法の習得	14. 9. 1～15. 2.28	カンキツ研究部品質機能研究室
吉澤 栄一	大分県柑橘試験場 津久見分場	貯蔵力のある果実の生産とその判定法	14. 9. 1～14.11.30	カンキツ研究部品質機能研究室
戸田 世嗣	熊本県農業研究センター果樹研究所	集合フェロモンを利用した果樹カメムシ類の環境保全型防除技術の開発	14.11. 1～15. 1.31	生産環境部虫害研究室
山本 匡将	鳥取県園芸試験場	樹体内貯蔵養分量の測定に関する研究	14.10. 1～14.12.27	生理機能部根圏機能研究室
三輪 直邦	福井県農業試験場	ナシなどの落葉果樹類の自発休眠導入過程等の生育予測技術の習得	14. 9. 1～15. 2.28	生理機能部環境応答研究室
松本 辰也	新潟県農業総合研究所園芸研究センター	ナシの諸形質の評価と遺伝様式の解明	14.11. 1～15. 1. 3	遺伝育種部ナシ・クリ育種研究室
宮澤 孝幸	長野県上伊那農業改良普及センター	環境変化に対応したリンゴ生産技術の習得	14. 9.16～14.10.12 14.11.17～14.12.12	リンゴ研究部栽培生理研究室
佐野 敏広	岡山県農業総合センター	ハダニ類の天敵昆虫、ダニ類の生態的特性の解明	14.10. 1～14.12.27	生産環境部虫害研究室
濱野 博幸	愛媛県今治中央地域農業改良普及センター伯方支所	はるみ・せとかの果実及び栽培特性と現地適応性について	14.10.21～14.12.20	カンキツ研究部栽培生理研究室

【表紙の写真に一言】

昭和52年、果樹試験場安芸津支場で「富有」×ⅡG-16（ふゆう×ⅡG-16）の交配実生から選抜され、平成6年にカキ農林7号「太秋」と命名登録された。11月上旬に熟する大果（400～500g）で非常に食味の良い完全甘ガキで、肉質がさくさくとして軟らかく、果汁がすこぶる多く、高級果実として生産ならびに消費が拡大している。



果樹研究所ニュース 第4号（平成14年12月）

編集・発行：独立行政法人 農業技術研究機構 果樹研究所 National Institute of Fruit Tree Science

事務局：企画調整部 情報資料課 TEL 0298-38-6454（平成15年1月11日より 029-838-6454）

住所：〒305-8605 茨城県つくば市藤本2-1 <http://fruit.naro.affrc.go.jp/>